
orzの魔法使い

反自律(= ` ´ =)

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

orzの魔法使い

【Nコード】

N1175Z

【作者名】

反自律（＝、・＝）

【あらすじ】

しょーもない性格のチートな大魔法使いにひろわれた青年が一方的に振り回されるだけのおはなし。

連作短編として気まぐれに書き下ろしていく予定。

1．いきだおれ。

こん。こん。

「つま先で蹴つても返事がない。
ただのしかばねのようだ」

ゴン！

「うつ！

……うつん……」

「……つち。

しかばねにはまだ早すぎたようだ。
残念。

せっかく活きのよい生体素材がゲットできたと思ったのに……。しかたがない。ゴーレムでも呼んで運ばせるか。生きたまんまでもそれなりに役には立つだろう。主に、わたしの暇つぶしとかに」

「うつ……。

うつん……」

「お目覚めになられましたかお客様」

「こ、ここは……っ、てっ！

うわぁっ！」

「三日三晩の昏睡から目覚めたばかりだというのにお元氣そうでないようですお客様。とても拾われたとき、全身表面積の三分の一以上を凍傷におかされ肺炎も併発していたとは思えない回復ぶり。

さすがはご主人様。完璧な治療処置でございました」

「あああ。あんた。

そ、その顔……。

な、なんで木の人形がしゃべっているんだ?!」

「いきなりの大声はまだまだお体にお障りになりますのでご自重くださるようお願いいたします。」

次にご質問にお答えしますと、わたくしはご主人様にメイドとして制作されたウッドゴーレムなので所与の機能として日常会話能力もデフォルトなのですがなにか？

最後に備考としていわせていただきますと、表情筋こそないものの、わたくし、その内面は十代の乙女として設定されております。したがって、初対面の方からそのように不躰かつ化け物を見るような視線で注視されると少なからず傷ついてしまうのだということを僭越ながらご報告させていただきます」

「あ……いや、すまん。」

よくよく思いだしてみると、おれって凍死しかけたところを救われてここにいるんだよね……。

メイドだかウッドゴーレムだか知らないが、助けてくれた人いきなりあんまりな態度をとったり大声を出したりしたのは、どう考えてもおれが悪かった。

謝らせてくれ」

「お気になさらず。」

わたくしの製造者でもあるご主人様からわたくしに遭遇したときに想定される一般人の反応についてもひととおりレクチャーされておりましたので、傷つきはしましたがそれでも想定範囲内の反応ではありました」

「その……今更だが、助けてもらった礼もいたい。あのまま森の中に放置されていたら、凍死か野獣に食われるか……いずれにせよ、おれ確実に死んでいたはずだ」

「そちらのお礼なら、わたくしではなくご主人様におっしゃるのが筋かと思います。」

あなたを拾ってきたのも治療したのも、わたくしではなくわたくしのご主人様ですので」

「そうだ。」

礼をいいたいのなら、このわたしに存分にいうがいつ！」

「うわっ！」

「……って、またでかい声だしたな、青年。

起きがけといい今といい、死にかけたばかりなのに随分威勢のいいことだ」

「だ、だって……目覚めてからすぐ、いきなり木彫りの人形のどアップから声をかけられたり、いきなりなにもない空中に人がでてきたりすれば、誰だって誰だって驚くだろう……」

「お前さんを治療したあと、お前さんが目を覚ましたら伝えるようにと言いついて、この子に寝ずの番をさせていたんだよ」

「三日三晩お客様の寝顔を見守らせていただきました」

「ごめんなさい。」

こんなとき、どんな表情をすればいいのよくわからない。

それはともかく……いきなり空中からでてくるなよ」

「お前さんが目を覚ましたとこの子から魔法通信が入ったので、取り急ぎ手っ取り早く魔法レポートを使って駆けつけたわけだが……なにか問題があったか？」

「心臓に悪い」

「ふむ。」

治療したときにひととおり健康状態もチェックしておいたのだが、心臓に疾患を抱えていたとは気づかなかったな。

そうと聞けば放つてもおけまい。さあ、再検査だ。さっさと脱いで全裸になりたまえ。今すぐ全裸になりたまえ」

「ご主人様。

わたくしは心が乙女ですので、殿方の全裸から全力で逃げ出したい思います。この場を中座することをお許してください」

「ん。わかった。」

何かあったら呼ぶからそれまでは部屋の外にでていなさい。最低でも二時間から三時間以上かけてしっぽりと楽しむ所存だ。

ほかのモノたちにもわたしの楽しみを邪魔するなと伝えておいて

くれ」

「心得てございますご主人様」

「あつ。こちら。」

いきなり服を脱がそうとするな抱きつく変なところを撫で回すなっ！

心臓に悪いというのいはそういう意味じゃないっ…………て…………。

あつ…………。

ああっーっ！」

「よいではないかよいではないか。

すでに一度、全身くまなくじっくり調べたり調べられたりした仲だ。

もつとも、三日前は意識がなかったから反応がなくてイマイチ面白味に欠けたがな」

「ふう…………。

行為のあとの一服は格別だぜ」

「うつつ…………。

もう、お婿にいけない…………」

「泣くなよ。

これがはじめてだというわけでもないし」

「そのはじめても、おれの意識がないのをいいことに、あんたが無理矢理…………。

はじめてがどうこういう以前に…………ヒトとしてどうなんすか？

生きたままの人間を分解掃除するというのはっ！」

「直接みて触って嗅いで味わった方が、手っ取り早いし確実なんだよ。

かなり細かくバラバラにしたけど、空間断層魔法を使ったから、痛みとかもぜんぜんなかったろ？」

2. いそづるう。

「と、いうことで、まずは食事の用意をさせたわけだが。さすがに三日間も寝たきりだと腹が空いておるだろう。遠慮なく喰らいたまえ」

「それはいいですけど……。
すきつばらにいきなりこんなご馳走つめこんだら、おれの腹、どうにかありませんかね？」

「意識がない間、胃の中にチューブを押し込んで定期的に流動食をいれてたし、排出物も尿道力テールを差し込んでいたし……まあ、問題はなかるう。」

それに、この程度の食事なら、ここでの常態だ。ご馳走のうちにはいらん」

「素っ頓狂になくせに随分と羽振りがいいんですね。」

ええと……その、ご主人」

「こう見えても、大陸一の大魔法使いを自認するわたしだ。」

この程度の魔法自給自足システムや魔法自動調理システムを塔内に構築することは、造作もない」

「はあ……。」

頭に魔法とつけければ、もう何でもありなんですな。ここでは。それと、ここは塔の中なんですか？」

「ああ。わたしが建造させた塔の中だ。お前さんは随分と運がいいんだぞ。ここは、多少の例外はあるものの、日常生活に必要なものはだいたいそろうようにできている。そういうふうに、このわたしが造った。」

何年でも安心して引きこまれるように！」

「最後の一行がなければ、たいへんにご立派でいらっしやいます。ところで、ここで揃えられない多少の例外ってなんですか？」

「わかりやすところで例をだすと、新しい衣服だな。」

布地や布地を縫う機構は簡単に作れるのだが、まともなデザインや配色を自動で生成させることは難しい。やってやれないことはないのだが、好みや流行というものがあるからな、あの手のものは。そのおかげでわたしは、何着も同じ服を量産して毎日それを着回しているわけだ。

基本的に魔法は、与えられた命令を愚直に実行するだけで、自身で考えたり判断したりすることが不得手なんだ。精霊魔法などは精霊が簡単な知能を備えたりしてくれるのだが、それでも複雑な知的能力があるわけではない。せいぜいがとこ、賢い犬やカラスと同程度だな。

で、だ。

余分な衣料、しかも男性用なんて、この塔では望むべくもなし。そんなわけで今、お前さんの服、今着せている寝間着しかないから「今、さらつとなんか重要なこといわれた気がするよっ！」

っていうか、もともとおれが着ていた服があつたはずでしょう。

あれ、どこやつちやつたんですか？」

「ぼろぼろだったし汚れきつて不衛生だったしで、塔の中に置いておきたくないんで捨ててさせた」

「さりげなく酷えよ！」

長旅で草臥れていたとはいえ、あれでもおれの一張羅だったのに……。

助けてもらつてこうして食事に招いてくださることに感謝しますが…… おれ、なに着てここを出て行けばいいんですか？」

「そっぴや、まだまだ衣服は高価なんだな。外では。

布や糸もまだまだ手工業で生産しているはずだし……。

お前さんの衣服に関しては、とりあえずあとで手配することにしよう。

それよりもお前さん、なんだってこんな雪深い時期に、着の身着のままの軽装であんな深い森にひとりで入ってたんだ？

見たところ、自殺願望があるようにも見えないし……。」

「い、いろいろと事情つてもんがありまして……」
「そうか。」

わたしはまた、てつきり、酒場で安酒かつくらったあげく馬鹿な賭でもしてその場の勢いで考えなしの軽拳に及んだのかと思ったが、違ったのか」

「ぎくつ！」

「ときにお前さん。」

聞きづらいことをあえて尋ねるが、ここを出たあと、いくあてはあるのかい？

いやなに。三日も寝ていたと聞かされてもやけに落ち着き払っているから、少々気になってな。仕事とか家庭とかがあるのなら、もう少しあわてて外に連絡を取ろうとするもんだが…… お前さん、そんなのもなかったらう？」

「ぎくぎくつ！」

「まともな職も帰るあてもない風来坊かい。」

そんなふうたいではあると思っていたが…… うむ。

そいつは、重畳」

「な、なにが重畳なんすか？ ひとの不遇を。」

なんか、非常に嫌な予感しかしやがらねーんですけど……。

あ。それと、住所不定は確かですが、職業は冒険者です。おれ、無職ではないっす」

「冒険者なんてのは、職にあぶれた行き場のない流れ者なるもんだ。あまり胸をはって名乗れる職業ではないだろ。なんの生産活動にも従事していないし、世間一般的にはアンダーグラウンドすれすれの存在ではないか。少なくとも、堅気と見なされることは少ないな。」

そういうことは…… ふむ。

あえて確認させてもらうが、当然、今回の救助活用に必要とされた経費を支払えるだけの蓄えもないわけだな？」

「ぎくぎくぎくつ！」

「そいつはもういいって。」

なに、そう萎縮するもんでもないさ。

お前さんの格好をみれば、甲斐性がありそうにもないのは容易に想像がつくし、もとより期待もしげいなかったし。

わたしは本職の医者というわけではないが、わたしがお前さんが意識を失っていた間に施された治療は、この世界の医療水準を遙かに凌駕した超最先端魔法治療だったのだからな。

おいそれと値段をつけられる代物でもないし、無理にでも対価を金銭に換算すると、下手すれば小さな国のふたつみつつは買えるほどになる。

ん？ どうした？

目と口をまん丸にして。

せっかく用意させた食事だ。冷める前に食べないと、味が落ちるぞ」

「い、いえ……。」

なんかもう……展開が想定外すぎて、どうリアクションしたらいいかわかんねーっていうか……。

はあ……。

おれ、どうにも大変な人に拾われちゃったみてえーだ……。

気分はもう、どうにでもなーれ、っと……」

「ぶつくさ情けないひとりごとをいつているところすまないが、はなしを先に進めさせてもらうぞ。

要約すると、お前さんは目下、いくあても帰るあても、職や家族はもとより、もちろん、治療費を支払えるだけの金もない、っと。

ここまでは、あっているな？」

「え……ええ。」

まあ……そうっすね」

「ふむ。」

それではひとつ、提案があるのだが……」

「……どうして、こうなった？」

「襲いたかったら、遠慮しないで襲ってもいいんだぞ？」

「あとが怖いから、襲いません」

「そうか？ まあ、わたしはどっちでもいいんだが。」

わたしの塔を維持するための仕事は、わたしが造ったり召還したモノどもに任せておけば十分なのでな。

お前さんにできる仕事といえば、せいぜいこれくらいなものだ。

おかげで……ふぁ……今夜は、ひさしぶりに熟睡できそ……すう

……」

「……本当に寝ちゃっよ、おい……」。

これっぽっちも警戒してねーで、おれに抱きつきながら。

しかしまあ、おれに唯一できる仕事は、抱き枕ってのは……なん
というか。

ああ。うう。

寝よう。

眠れるとは思わないが、寝よう」

3 いちやあけて。

「ぱつ」

「わ、笑うなっ！」

「こんな服を用意したのはそっちじゃないかっ！」

「くはっ！」

わはははははっ はははははっ」

「なかなかお似合いになっています抱き枕様」

「お前も人のこと気軽に抱き枕おいうなよこの木偶人形！」

「ご主人様の抱き枕様、略して抱き枕様になります。」

誤った略称ではないと愚考いたしますがなか？」

「あはつ。」

[illegible]

はあ……腹が痛い……。

こんなに笑ったのは久方ぶりだ。

いや、お世辞ではなく似合っているぞ。

お前さん、下の方はあんなに立派だったのに、小柄で女顔だからなあ。

それなりに様になるとは思っていたが、ぷくつ。ここまでハマッてしまうとはくはっ。はははっ はははははははははは！」

「ご主人様、抱き枕様はそんなにご立派でいらっしやるのですか？」

「おう。立派も立派。体は子供並の華奢な体格なの、それには似合わず、あっちの方はご立派な大人だった！」

今朝硬くなっているのを手探りで確認してみたところ、こんな長さでこんな太さで、さらに凄いのが先端の力りく……。」

「じゃーじゃーその主従っ！」

人にこんな屈辱的な格好させておいてさらに重ねて人を下ネタ漫談の素材にするんじゃないっ！

だいたいだなあ。

捨てたおれの服の代わりを揃えてくれるとは聞いていたが……なんだっておれがメイド服を着なければならんだよっ！」

「いや。ぶくつ。すまん。昨日の今日でいきなり男物の服は調達できなかつたんだ。

当座は、ぶはははは。ソレで凌いでくれ。は。は。は。は。は。は。は。は。近いうちにまともな着替えを手配するから……」

「抱き枕様の体格ですと、ご主人様の服は少々大きすぎますし、除去法でわたくしの服をお貸しするよりほかに方法がありませんでした」

「ね、寝間着を着ていればいいじゃないか。今朝まで着てたやつっ！」

「あの寝間着は来客用もので、あれ一着ありません。それにすでに洗濯中です。

抱き枕様もすでにご存じの通り、ご主人様は就寝時にはなにも身につけない方ですので……」

「おうっ！」

おかげでろくに眠れなかつたわっ！」

「あらあらまあまあ。それはそれは。

このようなときは、こほん。たしかこのように尋ねるのが作法なのですよね？

ええつと……昨夜はお楽しみでしたね？」

「楽しむどころか目が冴えて朝方まで寝つけなかつたわっ！」

みるよ、この目の隈！

んで、夜が明けたら明けたですぐに裸にひん剥かれて屈辱的な服をあてがわれるわ逆セクハラされるわ……。

助けてもらったことには素直に感謝するが、正直この扱いはないわ。

外が吹雪いていなけりゃ、速攻で逃げ出すところだぞっ！」

「まあまあ。くふふ。そう拗ねるな。

見ての通り、今日は外に出られる状態じゃないし、朝食が終わっ

たらうちのメイドに塔の中を案内させることにしよう。

他では見られないモノばかりだし、魔法使いでもなんでもないただの人間にこの塔の中を見せた前例はない。

滅多にないことだから、せいぜい光栄に思うがいいぞ」

4 ごあんない。

「……こちらが地上百三十八階になります。この階では主に……」

「あのよう」

「……錬金術関連の実験設備が置かれ、その何割かは常時稼働もしております」

「あのよう、って声かけているだろうが。」

「スルーしてねーで返事ぐらいしろよ木偶人形」

「では、改めまして。」

「なんのご用でしょうか抱き枕様」

「抱き枕、って……まあ、いいか。」

「要件はいくつかあるが……まず第一に、この案内というのはいったいいつまで続くんだ？ お前と一緒にこの塔の中をうろろろしはじめてから、かれこれ五日ほど経っているんだが……」

「そうですね。ちょうど今、予定の二割ほどを消化したくらいでしょうか？ わたくしも塔内のすべての施設を把握しているわけではありませんが、わたくしが知っている範囲に関しましてはおおよそ五分の一を案内し終えている勘定になります」

「二割……五分の一……」

「ああ。抱き枕様がよろめいていらっしゃる。」

「体調がすぐれないようでしたらご主人様に連絡をさせていただきますが……」

「いや、それは激しく遠慮させていただく。」

「あまりにも非常識なスケールに眩暈がしたただけだ。」

「だいたい、今の百三十……何階、だったけ？ とにかく、そんなに高い建物があったら近隣でも有名になっているだろうに……」。

「おれは、ここにくるまでこの塔の存在すら知らなかったぞ」

「魔法により、外からはみえないステルス仕様となっております。」

「また、塔ないしはご主人様に害意を持つ方は、いっさい立ち入るこ

とができません」

「……もはやなんでもありだな、魔法。

おれの冒険者仲間にも何人か魔法使いの知り合いがいるが、そこ
まで何でもありなやつはいなかったぞ。

冒険者だから、攻撃魔法に特化したやつが多かったからかも知れ
ないが……」

「ご主人様は、ええ。人呼んで不眠の魔女。知る人ぞ知る大魔法使
いであらせられますから。陋巷で冒険者などという賤業で糊口をし
のいでる雑魚雑魚しい魔法使いとは格が違います」

「なんか難しい単語列挙してさりげなく冒険者全体を貶められたよ！
確かに、ろくでもないやつが多かったし、世間的にみても肩身
の狭い職業だけだよ……」

木偶人形にそこまでおいわれるほど悪いもんでもねーぞ」

「そろそろ塔内のご案内業務に戻ってもよろしいでしょうか？」

「よろしくない。」

最初にいおうとして脱線したけど、そのご案内とやらにも飽きた
しそれ以上に疲れた。

お前のような木偶人形と違ってこつちとら生身の人間様だからな。
わけのわからん魔法実験設備とかをみられても正直、興味もなも
てないし、それ以上にわけがわからん。

第一、それ以前に、毎日毎日五十階とか百階とかの階段を昇りお
りさせられてみる。おれの場合は商業柄、たまたま多少鍛えている
からここまで耐えられるけど、他の奴なら初日に根をあげているぞ」
「そうでした。」

人間というのは一定量以上の運動を行うと筋肉に乳酸がたまって
ダルさを感じるのをごいしましたね。ご主人様は移動のさい、もっ
ぱら空間転移魔法を使用していらっしやいますし、わたくしも筋肉
を持ちあわせていませんで、うっかり失念していましたわ」

「そんな大事なことをうっかり失念しているんじゃないよ！

階数も非常識だが、一フロアの面積もたいがいなもんだぞ、この

塔。本当にひとつの建物の中なのか？

おれが歩き回った感覚だと、前に警護の仕事で出入りしていたかなり羽振りのいい貴族の邸宅がすっぱり収まってまだ余るくらいに広い。

お前さんのご主人とやらは、こんな無駄に広くてでかい建物をどうやって造ってどうやって維持しているんだが……。

いや。答えなくていい。どうせ魔法で、なんだろう。

ここにいると、外の常識がどんどん音をたてて崩れていくんだよな。ガラガラと……。

吹雪が続いていなければ、とつとこの塔を出て行くんだが……」

「メイド服のままで？ ご主人様に命を救われた恩も返さずに？」

「そんなもん、どっちもどうにでもおならあ。恩を徒で返すつもりはさらさらないが、元のサヤに戻れば金を稼ぐ手段なんていくらでもあるんだよ！

この服も、いつまでたってもお前らがまともな服をだしてくれないからだろうが！」

『天候のせいとはいえ、不自由をかけてすまないな』

「うわっ！ いきなりっ！ どこからっ！」

『事後承諾になるが、お前さんの治療をおこなった際、内耳に魔法通信末端を埋め込ませてもらった』

「おれには選択の自由もないのかよ！」

『服装に関しては、天候が回復し次第、調達することを約束しよう』

「そのお天気のことだけだよ、あんたのご大層な魔法とやらでなんとかできないのか？ なんでもありなんだろう？ あんたの魔法」

『うむ。』

やってやれないこともないのだが……天候の制御は膨大なエネルギーを消費するうえ、リスクも環境にたいする影響も、あまりにも大きすぎる。気軽にこなうことは推奨できない』

「わるいが、こっちちら無学な冒険者風情だね。」

もう少し砕けた、わかりやすいいかたでないと、なにをいつて

いるのかもよくわからない」

『この吹雪をとめようとする莫大な金がかかる。

そっちはなんともなるが、万が一失敗したら数年から数百年におよぶ暴風長雨干ばつなどの天変地異を誘発しかねないから、やめておいた方がいい』

「ははは……はあ。

そいつは、まあ、やめておいた方が無難だなあ。おれの着替えていどの問題で、そこまで迷惑をかけるわけにもいかねえ。

しかし、いつまで続くかねえこの吹雪」

「まったく、連続殺人事件が起こらないのが不思議なお天気でございますね」

『うちのメイドは読書家だな。

今は恋愛物にはまっているようだが、少し前までは推理物にのめりこんでいた』

「このような嵐の晩、館に足止めされた人々がひとりまたひとりと殺されていくのでございます」

「縁起でもないな。

この塔には人間といったら、おれとお前のご主人様しかないし……順番からいったら、真っ先に殺されるのはおれじゃないか……。

第一……ゴーレムがそんなもん読んでもしろいのか？」

『おもしろ半分にゴーレムに半自立型知性を組み込んでみたが、いかんせんここではサンプルとなるヒトがいなくてな。

しかたがなく創作物を読ませて参考にさせている』

「わたくし、ご主人様に制作されて以来、実際に生きたヒトと対面したのは、ご主人様を除けば抱き枕様がはじめてなのでございます」

「……あー、そういうかい。

悪うござんしたね、参考にする甲斐もない、ちんけなサンプルで……。

っていうか、この塔、普段、人の出入りってないのか？」

『当然だろう。』

なにせここは、わたしが研究三昧に耽るため、俗世間との交渉を
絶つために建造したんだから』

「さんざん偉そうなことやってて、やっていることは引きこもりの
かよっ！」

5. ぼくのかんがえたさいきょうそび

「抱き枕が塔内の案内に飽きたそうなので、今日はこれから抱き枕の当座の着替えをみんなで考えてみたいと思う」

「なんだよ、朝飯食べながら唐突に。あんた思いつきでしゃべっているだろ？」

それに、おれ……抱き枕で固定なのね、もう……」

「唐突に、というわけでもないぞ。前々から、昔に暇と酔狂に任せて作った方がいいが使うあてがない武器や装備品のテストをしたいとは思ってはいたんだ。」

今までは、いい実験台モルモットがいなかっただけで……」

「なんで武器や装備品に実験台モルモットが必要になるんだよ！」
「いやなに。」

調子に乗って魔法効果やなんやらを付加していくうちに、作っているわたしすらも空恐ろしい代物になってしまふことがしばしば……。

あつ。いや。なんでもないぞ。うん。

多少、風変わりなところがあるとはいえ、ごく普通の、それどころかむしろ性能がよくて使い勝手のいい品ばかりのはずだ。

例えばこの伝説の悪鬼シリーズなんかは、兜から脛当てまでを同シリーズで揃えようと力が一気にマックスまであがる。

そのかわり、妙な威圧感が醸し出されて誰もそばに近づけなくなるのが難といえば難なんだが……。

あと、性能では悪鬼シリーズに今一步及ばないものの、この剣道着シリーズも平均的にパラメータをひきあげてくれるのでお勧めだ。煮染めたような汗の匂いさえ我慢できれば、なかなかの掘り出し物だぞ」

「どっちも駄目じゃん。」

おれ、性能のために日常生活を犠牲にする趣味はないし、それ以

前にそんな重そうなを着込むと動きが鈍くなりそうなので、お断りします」

「そういえば抱き枕は、発見したときも信じられないくらい軽装だったし、武器らしい武器も短刀くらいしか持っていなかったな。

冒険者というのは、普段からあんなもんなのか？」

「冒険者にもいろいろいるんで、全般がどうかは軽く決めつけられませんかね。

おれだけのことに關していえば、基本的に武装はナイフ一本。たまに、必要に応じて弓を使うくらいですかね。

ゴテゴテと重いのは趣味じゃないもんで」

「そうか。では、甲冑や兜の類はいらないか……。

ひよつとして、楯もか？」

「楯も、あまり……。

あんな邪魔くさいもの持ち歩くより、攻撃なんて避ければいいじゃない、とか思っちゃまうもんで……」

「うむ。

抱き枕は、見た目の通り速度重視の軽戦士タイプなのか……。

では、こんなのはどうだ？」

「……なんなんすか？」

この、羽の生えたサンダル……」

「これを履くと、空を飛べる」

「凄いけど、意味ねー……。

狭いダンジョンの中ではかえって不便です。

もつと普通のでいいですよ」

「注文が多い奴だな……。

ええと……このナイフなんかどうだ？ 柄の突起を押すと刀身が飛び出すという……」

「避けられたり相手が硬くて刃がたたなかつたりしたら、それで終わりじゃないですか。

発想はともかく、実用的ではありませんね」

「む。」

ではこれは。

常時刀身に即効性の毒薬が流れでる仕掛けで……」

「そんなもん、手入れするのにもいちいち神経を使いそうでいやす」

八時間後。

「はあ、はあ。」

いろいろと注文が多いなあ、抱き枕」

「というか、そっちがおかしなものばかりだしてくるからですよ。

こっちにしてみれば命を預ける道具なわけですから、変なところで妥協して後悔したくないだけです。」

光ったり火がついたり凍ったりビリビリしたり、とかいった余計な機能はなしにしておいてください。」

シンプル・イズ・ベストです」

「これでも作るのが難しいんだぞ、その手のは……。」

各種エレメントを武器の中に封じる仕事ができる場所は、大陸広といえども、ここを除けば数えるほどしかない。

そうした仕掛けを除けば、武器なんて単なる鋭利な金属片にすぎん」

「剣だってナイフだって、普通の武器は鋭利な金属片です。」

それ以外のものの方が異常なんです！」

「そうかいそうかい。」

では、とびつきり切れ味がいいのを出してやろう。
ほれ。

こいつはな、切れ味を追求するあまり、少々刃が脆くなってしまうてな。力のかけ具合がちょっとズレただけで刀身が折れてしまうという、扱いに困った逸品だ。

持ち手を選ぶ分、性能は折り紙つきだぞ。腕がいい奴が使えば鋼の塊だって斬れる」

「そうそう。まともなものもあるじゃないですか。そういうのでいいんですよ。」

「試させてもらっていいですか？」

「ええと。」

「たしか、打撃を受けると全面にトゲトゲが飛び出す甲冑って、こいつでしたよね？」

「ああ。」

「そいつ……」

「よっ」

「シャキン。」

「……だ……が……」

「ほっ、と」

「ザクッ。」

「ドサ。」

「うん。」

「なかなかの斬れ味ですね。これなら、実用上、なんの問題もありません」

「……おい、抱き枕。」

「お前……」

「今、なにをした？」

「見てわかりませんでした？」

「ああ。素人さんには早すぎて見えなかったか。」

「甲冑に近づいて両断しただけですが、なにか？」

「ええつと……」

「それは、刺激を受けた甲冑が突起をだす時間も与えずに……」

「こうみえても、速度が身上の軽戦士でしてね。おれ。」

「条件さえそろえばこの程度の芸当は、普通にできます」

「惜しいな……」

「メイド服姿でなければ、結構決まっていたのに……」

「メイド服っていうなあっ！」

6 おでかけのじゅんぴ。

「ついに吹雪がやんだ」

「おお。ついに！」

ようやく、町に帰れる！」

「ちよつと待て、抱き枕。

帰るのはいつこうに構わんのだが、そのメイド服のままではいろいろと都合が悪くないか？

お前さんのに」

「ああ。

そついや、当座の着替えを探してもらったけど、塔の中にはヘンテコアイテムばかりでまともな服がないことが判明したんだっけな……。

このナイフは、なかなかの収穫だったが……」

「もしよかったら、わたしの服を貸してもいいんだが……」

「あんたの白衣とか魔法使いの長衣とか、おれが着ると裾を引きずるんだよな。

第一、町中でひとめで魔法使いとわかる服装をしていたら、なにかとトラブルに巻き込まれそうだし……」

「外では、まだまだ魔法使いは迫害されているのか？」

「迫害、とまではいかないけど……警戒は、されているかな？

圧倒的に人数が少ないし、一般人には逆立ちしてもできない奇跡をあつさり起こしてみせるし……。

危険視されている分、報復や反撃をおそれて直接手出しをされることはまずないんだけど……逆に、魔法使いにしか出来ない仕事をいきなり往来で頼まれたりする」

「ふむ。

それで、下手に断つたりすると、トラブルになる可能性があるか」
「本物の魔法使いが魔法使いの格好してうるついているんなら、な

んの問題もないんですけどね。

魔法を使えない者が魔法使いの格好して町中をうろつくのは、どうぞいちゃもんをつけてくださいって看板を担いで歩いているようなもんです」

「それは、困ったな。」

わたしは、塔のまわりの森までなら問題はないのだが、人の多い町中までは出られないし……」

「ええっと……それはまた、どうして？」

その昔、悪いことでもして、指名手配でもされているんですか？」

「悪いことは今も昔も数えきれないほどしているが、いつでも身バレしないように心がけているので指名手配はされていない。」

このわたしが、そんな下手をうつわけがない」

「そんなところで胸を張らないでください」

「問題は、だな……。」

その……町中、だぞ？ 人がいっぱいいるじゃあないか？」

「いますね。」

町中ですから」

「怖いだろ？」

「なにが？」

「だから、人が」

「……なんで、そうなる？」

「だあーかあーらあー！」

わたしは、他人が怖いのだ！

そのために、こんな塔まで造って、絶賛引きこもり中なの！」

「マジで？」

そんな理由で？」

こんな……デカイ塔を造ったってんですか？」

「マジマジ。大マジ。」

筋金入りの引きこもりを舐めるなよっ！」

「だから、そういう情けないところで胸を張らないでくださいって。」

はあ……。

呆ればいいのか、笑えばいいのか……。

では、そちらの木偶人形におれの着替えを買って来てもらおうというのは？」

「わたくし的にはいつこうに構いませんが、わたくしのようなモノがいきなり町中に現れて普通に買い物とかしたら、町の方々がたいそう驚きなるのではないでしょうか？」

「そうだった。」

普通のゴーレムでもかなり珍しいのに、人間とほぼ同じ大きさで、しかも普通にしゃべる木偶人形とかが買い物にいたら……たしかに……それはそれで、騒動になるな……」

「では、こういうのはどうだろう？」

抱き枕が、そのメイド服のままでいったん着替えを調達してくる。というか、これ以外の方法はないのではないか？」

「……あー……。」

あんた。

なに、にやけているんですか？」

「なんなら、わたしのメイク道具も貸してやるぞ。」

なに、お前さんは、そこいらの娘っ子よりよっぽど可愛らしい顔をしているんだ。自信を持ってい。通りすがりの人から見たら、絶対、お前さんがスカートの中に大層なモノを装備しているとは想像さえしないはずだ」

「褒められているんだか貶されているんだかよくわからないコメントどうもありがとうございます。」

念のために聞きますが……この塔に、メイド服や魔法使いの服以外の服は……」

「ないな。皆無だ。」

わたしは、この服を着ているか、さもなくば全裸かの二択だ」

「そついや、寝るときも下着まで脱いでいたな、この人……」

「お前さんが来るまでは食事時でも全裸でしたかなにか？」

というか、魔法とか研究をしているとき以外、特に服を着る必要性を感じないのだよな。

自分の周囲の空調その他の環境整備は、魔法を使って常時、快適な状態を保っているし」

「駄目だこの人、早くなんとかしないと……」

7. どうか、ひとちがいということにしておいてくれ。

「うつつ。さみい」

「凍死しかけた夜を思い出すぜ」

「しかし、まともなブーツがあつたのは僥倖だな。

しかし、これ、なんで出来ているんだろ？ 革よりもずっと軽いし、そのわりには、水や雪もしっかりはじくし。

……これで、色が蛍光ピンクでなければ文句はないんだが……」

「いや、魔法関係のことに關しては、考えるだけ無駄か。

どうせ、説明されてもよく理解できんし」

「しかしまあ、この町もひさしぶりだが……どうか、知り合いに会いませんように。」

こんな格好しているとを誰かに見つかったら……」

「シナク！ シナクじゃないか！」

「ぎくつ！」

……だ、誰のことでしょうか？」

わ、わたくしは通りすがりハウスメイドでございますがおほほほ
「ほ」

「あつ。女だ。

どうもどうも。人ちがいだったようですね。失礼しました。

いや、顔つきといい背格好といい、お嬢さんがシナク・チンクという知り合いの冒険者に瓜二つなものでしてね。

いやあ、それにしても、見ればみるほどそっくりですなあ。

わははははは。

シナクの野郎、前々からチビで女顔だとは思っていたが、女だったら即座に押し倒している可愛い顔をしているのだが、そんなやつがメイド服とエプロンドレスをつけると、ちょうど、お嬢さんとそっくりなわけです。

わはははははは」

「わ、わたくし、ご主人様にいつけられた用事がありますので、ここで失礼させていただきますねおほほほほ」

「はあはあ。

見えなくなっ たか……」

「……あの脳筋野郎。

本人の前でないからってチビだの女顔だのといいたい放題いいやがって。

……あとで泣かしてやろう……」
がしっ。

「クンかクンか」

「うわっ！」

「シナクの匂いがする」

「つて、なにいきなり後ろから抱きついてい……る、るる。

いるんですかつ！ あなたはっ！」

「シナク、ひさしぶり。

なんでシナクはスカートをはいているの？ 新しい趣味にめざめたの？」

「シ、シナクって誰のことでしょうか。」

わたくしはご主人様のいいつけでおつかいをしている通りすがりのハウスメイドでございます」

「うー。

わからないけど、わかった。

今のシナクは、シナクじゃない」

「そうそう。

人ちがいでございます。

そ、それでは、わたくし、先を急ぎますのでこれにて失礼！」

「はあはあはあ」

「なんだって、今日に限って立て続けに知り合いと遭遇するんだか」

「しかしまあ、魔法使いつてのは、なんでああもわけがわからんやつばかりなのか。」

「あいつといい、塔の人といい……」

「はあ……」

まあ、いいや。

用事を済ませてさつさと帰ろう……」

「あー……」

本当だつ！ シナクにそっくりなメイドさんがいたあー！」

「これこれ、コニスちゃん。」

人様を指さしては駄目だよ」

「……またかよ、おい……」

「やあやあ。お嬢さん。」

われわれは夫婦で冒険者をしているコニスとレニーというものでね。

さつき、たまたまいきあった、やはり同じ冒険者仲間から、ここ数日姿を消している知り合いにそっくりなメイドさんが市場の方に向かっていったというタレコミがありましたね」

「ちょうど、買い物する用事もあったし、市場で会えればいいね！ つてはなしていたところなんです」

「その冒険者の方つて、こーんなにデカイバトルアックスを担いだよく笑うマッチョ体型の方ですか？ それなら、先ほど確かに声をかけられましたか。」

ええ。

顔が怖いのでそうそうに逃げ出してきたところです」

「そうそう。おそらく、その筋肉ダルマの斧使いで間違いないでしょう。」

ところで、シナクにそっくりなメイドさん。この辺でみかけた覚えがありませんが、どちらのお屋敷にお勤めでしょう？」

「こらー！

レニーくん、初対面の人にいきなりつつこんだ質問するなよー」

「あつ。いや。」

この辺に不案内なようなら、道案内のひとつもしようかと……」

「嫁さんが横にいるのに堂々とナンパしておるのかー！」

「あ、あの。」

わたくし、先を急ぎますので、これで失礼させていただきますね
おほほほほ」

「はあはあはあはあ」

「レニーの野郎、あれ、絶対、勘づいているよな……」。

いや。まったく疑ってないコニスやあの程度のことでごまかされるバツカスとかが例外的にアホすぎるのか。

……ってか、普通、見分けられるだろう。見慣れた仲間の顔くらい……」

「ちよいと、そこのお嬢さん」

「（まったく、今度はなんだよ）は、はい？」

わたくしのことですか？」

「お時間があるようでしたら、お茶でもごいっしょに……」

「単なるナンパかよーっ」

「ドガッ！ バキッ！ ガスッ！」

「はっ。」

思わず半殺しにしてしまった」

「だ、誰にも目撃されていないよな」

「すまん。ナンパ野郎。あんたは運とタイミングが悪かった。ついでに、人を見る目もなかった」

「おれはさっさと用事を済ませて帰るから、お前はここでゆっくりと寝ていてくれ。命には別状はない……と、思う。」

それに、ここならすぐに誰かが取りかかって、介抱してくれるだろう」

8・とうへのきかんと、とうからのきかん。

「おし。」

必要なものは、一通り買い揃えたな。

店の人がなんか人の顔をジロジロみていたが、メイドが男物の服を買っても別に問題はないよな、うん。使用人が主人の言いつけで買い物に来ることは、よくあることだし、念には念をいれて、今まで入ったことのない店を選んだし」

「さて、さつさと着替えて男の格好に戻りたいところだが、町中だとそうもいかないか。

押さえている宿屋には、この服装では帰りたくないし。

いったん塔に帰ろう……」

「つと。」

ここまで人通りのないところに移動すれば大丈夫だろう。

あー、あー。

ゴシユジンサマコノアワレナメシツカイメヲドウカオクリカエシ
テクダサイマセ。

畜生。

わざわざこんなクソなキーワードに設定しやがってあの性悪魔女め」

『念のためにいっておくが、聞こうと思えばこちらはお前さんのひとりごとともすべて聞こえるのだがな。内耳に通信装置を埋め込んでいる関係上、お前さんが耳にした音声はすべて拾えると思っている。それと、このわたしがせっかく考えてやった素敵キーワードだ。

棒読みせずもつと感情を込めていうように』

「おれにプライバシーはないものか。

それと、そんだったら別にキーワードなんか決める必要はないだろうっ!」

『音声を拾えるといつても、四六時中監視しているほどこつちも暇ではないんだ。日常生活ではまずいうことのないセリフをお前さんの声でいわれたときだけ、アラームが鳴るように設定している。だから、キーワード自体は必要だ。』

……それ以外の音声はゆっくり楽しむために録音しているだけだ……』

「なんか最後に不穏なことぼそつと小声でつけ加えたよこの人っ！」
『気にするな。後でお前さんの言動をチェックして個人的に二ヨ二ヨするだけだ。』

気にするな、というのが無理なら、治療費の一部だと割り切れ』
「ま、いいですけどね……」。

なんか、あんたには逆らっても無駄なような気がしてきたし……。それより、人が来る前にさつさと塔に帰してください」

「ほいよ」

「わっ！」

いきなり、一瞬で移動するからな。

いつまでも慣れないなあ、こいつには……。

と……さてよ？

この空間ナンタラを使えば、直接おれが借りている宿の部屋まで行けたのでは？」

「試してやってもいいのだがな。」

転送先の正確な座標がわからない場合は、かなり危険だからお勧めはしない。

最悪の場合、かの有名な石の中にいる状態に……」

「なんだかよくかわらないが、危険だというのならやめておくのが無難なんでしょう。うん。」

それではおれは、さっそく着替えてきます。

……って、なんでついてくるんですか？」

「ここまで面倒見てやったんだ。生着替えくらい見せてくれても罰はあたらないだろう」

「おれの隅から隅まで、それこそ臍物の中身まで知り尽くした人になにいつているんですか。」

「さあ、出ていつてください」

ズリズリズリ。

ボタン。

「本当になんなんだろうな、あの人は……。
いまだに性格が把握できん」

「ふう。」

「やっぱり、この格好の方が落ち着くな。」

「さて、と。メイド服も畳んで、と……」

「おう。」

抱き枕が男物の服を着ている。

「いや、これはこれで、新鮮でいいな」

「おれがメイド服を着ている方が異常なんです。
とりあえず、この服はお返ししておきますね。」

それから、早速ですが、もはやおれがこの塔に居続けるべき理由はありません。今すぐにでも退去したいと思います。

もちろん、命を助けていただいた恩は恩として、必ず返しに来るつもりです。

そのためにも、はやく以前の生業に戻って仕事に精を出したいと思います」

「そうか。借りとか貸しとか、そうそう気にしなくてもいいのだがな。お前さんがそういうのなら貸しにしておこう」

「それでは、これ以上お手を煩わすのも気が引けますので、おれは歩いて町に帰ります」

「予想していたよりも、あっさり帰してくれたな」

「まずは、ギルドにいくか。」

報酬がいくらか残っていたはずだし、まずはそれを精算して貰っ

て……」

「あ。シナクさん。おひさしぶりです。無事だったんですね。

ここ数日、顔を見せなかったからソロ中にへまをしてお亡くなりなっただか、吹雪でどこかに足止めされているのかってみんな噂していたところなんですよ」

「後者はともかく、前者は縁起でもない噂だな。

実際には、あー、吹雪で足止めくらっていたことは確かだな。

ええっと、今日はだな。まだ受け出していないおれの成功報酬があつたと思うんだけど、その精算をして貰いたくて……」

「はい。

で、いかほどご入り用ですか？」

「全部」

「へ？」

「だから、全部。

こつちを留守にしている間に、出先でへまをして大きな借りをつくっちまってるね。その埋め合わせをしなければならないんだ」

「え？ あ、あの……。

ちよ、ちよっと、お待ちくださいね……。

すいませーん、ギルド長おー！

シナクさんが全額……」

「なに？ ちよっと待てよ、おい。ギルドにはそんな多額の現金は置いてないぞ。

誰か、両替商に使いをだせ！」

（……ずいぶんと、待たされるなあ……）

ズリズリ。

「よっ……と」

「ミスリルのインゴットって、結構重いのが。金貨換算だともっと重くなるってのはなしかったし、しかたがないのか。

しかしおれ、いつの間にか結構、ため込んでいたんだな。

さんざん待たされたあげく、両替商の店長が出てきて明日までには全額揃えるから、今日のところはこれで勘弁してくれて土下座までされちまったもんな。

別に急がないし、金貨が無理ならレアアイテム換算でもいいですよ、っていったらギルド長ともども涙流して喜んでいたけど。

おお。久しぶりの宿屋だ」

「おや、シナクさん。ようやく帰ってきたね。部屋はまだちゃんと取ってあるよ」

「ありがと、おばちゃん。

これでまた先払いしておいてね」

「おや、金貨かい。ずいぶんと羽振りがいいね。

しばらく顔をみないと思ったら、またソロで深いところまで潜っていたんだね」

「まあ、そんなところ。

あとで部屋に飯とお茶、それにお湯、もってきてくれる」

「あいよ。いつもの通りね」

ドサッ。

「ふう」

「いつもの通り、いつもの通り。

まったく、この硬いベッドこそ、いつもの通り！

ああっ！ ついに帰ってきたぞ、畜生っ！」

どさっ。

「そいつはよかったな」

「な……なんで、おま……」。

裸で降ってきやがりますか……」

「お前さんがようやく一人になったようなのでな。通信機の位置から安全な座標を割り出して、移転してきた」

「い、いや……」。

そっいうことではなく、だな……」

「お前さん、抱き枕としての役目が、まさかあれで終わったか思
つていやしないだろうね」

「こ、こら……」

ガチャ。

「シナクさん、いいかい？」

お食事とお茶とお湯、ここに……あら？

シナクさんの上に、裸のべぴんさんが……」

「宿屋の人、勝手にお邪魔させてもらっている」

「あらあら。」

若いっていいねえ。

わたしはなにも見なかったし、このことを誰にもいいませんから
ね。

そうだよねえ。シナクさんも童顔だけど若い男の子だもんねえ。

こういうこともあるよねえ。

そののべっぴんさん、もうひとり分、お食事の用意しておく？」

「それには及ばない。

食事は塔ですませてきた。あとは寝るだけだ」

「そうかいそうかい。

シナクさんをよろしくね。シナクさんも、この人のことちゃんと
大事にするんだよ。

それではあとは若い人同士、ごゆっくり
バタン。

「あっ……あっ……あっ……」

「やっぱりお前さんの抱き心地は最高だな、抱き枕。

ん？ どうした？ 先ほどからフリーズして。

体が麻痺しているようなら食事もわたしが食べさせてやろうか？
なんなら、口移してもいいぞ」

「なんじゃこりゃーっ！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1175z/>

orzの魔法使い

2011年12月27日19時49分発行